

全文連 設立十周年記念講演会(平成14年12月4日)

## 「文化財赤十字」

東京芸術大学学長 平山 郁夫 先生

本日は、国宝をお護りになっている各機関そして、またそれを保持し、いろいろ修理などされている関係者の皆様にお会いすることができまして、大変うれしく名誉に思っております。

私も文化財保護ということで、いろいろな機関を通じてお手伝いさせていただいておりますが、本日は「文化財赤十字」という題で、お話ししたいと思います。

この「文化財赤十字」という精神は、どういうものかということから申し上げます。

我々は文化財を日本の国宝・重要文化財をはじめ、外国の人類の文化遺産を自然崩壊や戦争やその他の事故から護るといいうことを日本の各機関、ユネスコを通じてやっております。日本の国際貢献としては、文化財だけでなく、人道的な面も経済的な面もあるのですが、ともすると文化財というものを物として扱う、特に、外国の紛争地で例えばアフガニスタンを取り上げた場合、これをどういう風に護っていくかということです。

アフガニスタンではアレキサンダー大王東征以来の二千数百年の大変な文化の積み重ねがございますが、今では多くの人々はイスラム教徒です。最初にキリスト教が入ってきました。また更に前にはインドから仏教が北上し、仏教東漸の道が一番重要な場所にありました。そういう仏教遺跡だとか、他の異文化のものがたくさん埋蔵され、或いは発掘されております。

では、これらのものに対してアフガニスタンの人はどういう風に思っているか。助ける側で一方的に、例えばバーミヤンの大仏を破壊してけしからんという風に思いがちですが、一般の多くのイスラム教徒というのは全然考えが違います。

もし、外国で文化財を人類の文化遺産として保護し、技術協力や経済協力をする時は、相手国のいろんな事情を文化史的な背景や国民の民族性と



いうものをよく理解する必要があると思います。

アフガニスタンの民族もいろいろな民族で構成されております。例えば南の方のパシュトゥーン族とか、パーミアン地区はハザラ族とか或いは北の方のウズベキスタンに近い方のウズベク族とかタジキスタンに近いタジク族とかカザフ族とかいろいろな多民族国家なのです。

ですからソ連軍が1979年(昭和54年)に侵攻したような時には、自分たちのテリトリーが侵されるということで、これには超党派で迎撃いたします。しかし、これを撃退して国内問題だけになりますと、また主導権争いで内部紛争が続いております。それが昨年同時多発テロの結果、米軍の攻撃或いは、多国籍の平和維持軍が進駐して、何とか今平常な姿を見せておりますが、23年間に渡る内紛で全土が全く荒廃しております。カブール市内は大半が瓦礫の山となっております。

私も今年の5月にユネスコ主催によるアフガン文化財復興支援セミナーというのに参加いたしました。続いて8月にはブラヒミ国連代表に招かれて再びバーミヤンへ飛びました。どうしていくかということです。昨年まで内戦が続いていたときの第一線の兵士たちは戦争のなかで育っています。ですから人を殺すのは何とも思わない。それを生業としている人たちですから字も読めません。歴史も思想もそんなものありません。しかし

複雑な兵器の操作は習熟しております。こういう若者をどういう風にして復興の枠内に入れ込むのか、大変なことなんですね。また、戦争未亡人が100万人いると言われておりますし、難民は細かく計算すれば、500万人とも言われております。

私も北の方へ200km、カブールからのカルザイ大統領政権が及ばないところへ行ってみましたが、約3時間くらい自動車で行くと、激戦の後です。ソ連製の戦車や兵員輸送車が赤茶けて放置されたまま道路の左右に転々と並んでおります。石に赤ペンキが塗ってあるのを見かけましたので、あれは何かと尋ねると全部地雷の敷設している場所だということで、それがあちこちに無数に見えます。足の不自由な人がうろろろしております。そういう地帯ですから、勿論畑を耕すこともできません。わが家に帰ってみると、入るなりドカンとやられる。そういう大変な所で、一体これをどういう風にして復興させるのか、ということです。

ですから、この間の国民議会で意見続出で大騒ぎをやりましたが、何とか暫定内閣で、カルザイ前議長が大統領になりました。私も何度もお会いいたしました。というのは、一昨年アフガニスタンがどうにもこうにもならないときに、日本政府外務省の中近東アフリカ局長は、アフガニスタンの北部同盟4派或いはまた、タリバン勢力に近い人を介して双方の代表を日本へ密かに呼んだことがあります。

私に会ってこれらの代表と話をしてくださいということで、北部同盟の代表は鎌倉の自宅までやって来ました。北で4派がタリバンに封じ込められて、8割5分まで占領されていたわけですが、これ以上内戦が続くとアフガニスタンは死に絶えるということで、和平交渉を始めたわけです。国連では具合が悪いからユネスコに文化の面でお願いたしたいということで見えたわけですが、それで私は4派の代表プラス、タリバン代表の穏健派に声をかけて、一緒にパリのユネスコ本部の松浦事務局長の所へ行ってみて、世界に向かって、“もう戦争をやめたい”という意志を述べるので、入国を許可してほしいと、ある程度まで工作したことがあります。しかし、バーミヤンの大仏の爆破その他でまた、内戦状態に戻ってしまいました。

しかし、今の内閣の中に北部同盟の有力者が代

表として入っており、その人が非常に強力な閣僚の1人になっております。

そういうことで、私がアフガニスタンへ行きますと、治安が悪いところを守ってくれたり、誰に会いたいということちゃんとセットしてくれます。そういう風に人が困っているときにいろいろ気持ちを通ずると、どういう状態になってもお互い立場が違っても真心というものは通じるものです。

ですから、文化財保護も人間の医療と同じです。あまり専門が分化しますと人格より何より自分の受け持ちの臓器さえ治ればいいということで、すぐに手術をし、外科的には早く治ります。しかし肝心の命・人格・人間性が失われる場合もあります。だから名医というのは、問診でこれは精神的にストレスでダメージを受けているとか、或いは外科的に一刻も早く処置しなくてははいけないとか、ということを経験、外科様々な分野から検診し、そして、カルテをつくって人命を助ける。人間性を失わないで助けることと同じように、単に物として扱っては、特に紛争地帯で価値観の違うところに踏み込んで行った場合、善意で臨んでも逆の結果が生まれると思います。

アフガニスタンではバーミヤンの大仏をタリバンが壊せという命令を出したとき、私もユネスコを通じて、人類の文化遺産ないし、仏教東漸の大変な遺産であるから壊すなということ呼びかけました。1回目は聞き届けられましたが、しかし、昨年の3月にはこれを爆破しました。

なぜかということ冷静に考えますと、タリバンは独裁的で人権を無視しているから、これを経済封鎖するのはいいのですが、アフガニスタン自体を封鎖したわけです。冬に弱いお年寄りや子供に多くの犠牲を出しました。もしこの時にお年寄りや子供等弱者を助けて、タリバン政権だけに制裁を加えることであれば、私はバーミヤンの大仏は爆破しなかったと思います。大勢のアフガニスタンの人間は死んでもいいのか、大仏が残ればいいのか、とそういう問いかけであったと思います。

カンボジアの時もそうでしたが、内戦というのは思想的なことで、また貧困でも争いが起こります。そして勢力の強い方が残ったものを多くとって弱いものが犠牲者になります。

私もまだポルポトの銃声が聞こえる平成2年でしたか、ユネスコの親善大使としてカンボジアの

プノンペンへ訪れたことがあります。フンセン氏が密かに目の治療を日本政府に依頼してきました。当時日本政府はポルポトを承認していてフンセン・プノンペン政府は承認していなかったもので、外交関係がなかったのですが、東京で治療したという経過がありました。プノンペンの首相官邸へ行きますと、「自分たちの民族の誇りであるアンコール遺跡の辺りを何とか保護してほしい」という申し出でした。これはフンセン氏始めポルポトその他の勢力が仏教を信じているグループだったということです。

私も行って見て安心したのは、意図的に仏教遺跡を破壊していないことです。多少は銃撃戦になってその影響はありましたが、むしろ盗掘されたのは平和になってからです。そういう風に自分たちの誇りである遺産であれば攻撃命令を下さないわけです。

しかしアフガニスタンの場合は、たとえすばらしい文化遺産であっても自分たちの民族の誇りとは言わないですね。

クシャン王朝時代或いは同時代の様々な仏教彫刻を始め色々ありますが、考古学者とか歴史学者の専門家が大事にしております。そういうのは、革命でみんな追い出されたり、処分されました。多くの宗教の名を借りて大変なことをした原理教と称した人たちは、むしろ破壊へまわる方です。これを民族の誇りであるといいますとアフガニスタンの人は声を出して反対すると思います。平気で壊すということです。そこをこれからどう教育し、人類の文化遺産であるということを理解させるのか。大変難しいのは、国を治める政府が人類の文化遺産の破壊を命じたということです。これは近代国家になって初めてのことです。

世界では世界遺産条約、ユネスコではユネスコ遺産条約があります。日本が今度加盟いたしました。この条約では重要な文化財の不法輸出の禁止、売買の禁止という厳しい法律です。今回のアフガニスタンでは多くの文化遺産が流出しており、盗掘されたり、カブール博物館から略奪されたり、国外へ持ち出されておりますが、皮肉なことに違法行為をしたために護られたわけです。泥棒とか略奪者とか盗掘者によってアフガニスタンの文化財のある部分はタリバンの破壊から免れた。これを罰せるのか。

私は昨年5月のユネスコの執行委員会に問題提起しました。戦争が始まったら何百万という難民がイランやパキスタン等周辺諸国へ流れている。パスポートもビザも持っていない違法出国です。強制送還され、国に戻れば飢え死にか殺される。国連の難民高等弁務官事務所等はこのような難民の救済に当たっております。

それで、文化財でもこのようなことがあるのではないかと提訴しました。国際法では輸出はだめ、売買はだめ、不法移動は認めないとしています。認めなかったら全部壊されるんですよ、壊される責任は誰がとりますか。それは考えられない。などと押し問答をして、法律というのは永久不変のものではないのではないかと、文化財を救おうとするのに、難民への扱い、人道的な扱いと同じではないでしょうか。そこで、『文化財難民』という言葉を使いました。するとこれは大変おもしろいといわれ、それで、ユネスコの国際法の法律顧問に動議しました。ユニークな発想だけどいいでしょうということで、11月の総会に発表いたしました。180カ国が集まっておりました。

『文化財難民』として善意で流れ込んできたものを買った人は売った人を知らない。結果的には文化財を助けたことになる。しかし買った人は善意で買ってもカブール博物館のものだとか、いやバーミヤンの壁画を剥離させて盗んできたものだとわかれば、これは返すこととする。いろいろ法的な面を専門家と相談しながら作り上げ、承認されました。このように、我が国でもヨーロッパ各国でも『文化財難民』として修理をしております。

これは、私がユネスコから全権を委任された親善大使として行っていることなのです。

『文化財難民』と知らずに買った人は、輸送費だとか、修理費だとか経費がかかっています。保険もかけて送っています。そういう必要経費はある程度は補償しましょう。後は善意の寄附であるということで、カブール博物館が復興したときには返還しますということで、現在120数点が善意の人々から集まっております。これをインターネットで流しておりますが、ドイツで見たとかどこどこで見たとという情報ははいって参ります。

文化財を紛争国や貧困国で助ける時は、人を助けないとだめだということです。

文化財の人道的な赤十字の精神というのは、文

化財を修理したり保護するときは、その国・地域に住んでる人々を助ける。助けながらこれはあなた達の大事な財産であり、文化が違って受け持つ時代が違って、アフガニスタンは古い時代から中央アジアの東西南北の文明の十字路として、ジンギスカン・アレキサンダー・マルコポーロ等いろいろな人とともに様々な文化が通過してその足跡を遺してるんです。パキスタンからアフガニスタンに向けて、アレキサンダーが通った峠はマダカンダーパスといいますが、カンダハールもアレキサンダーの町という意味です。エジプトのアレキサンドリアもそうですが、方々にアレキサンダーが歩いたその足跡で町をつくっております。そういう由緒のある土地にあなた方は住んでいるのです。責任があるのです。それを誇りに思えるように手助けをする。そうするとバランスがとれるわけです。

復興を要する国へ先進国が経済力と機械力を持ってワッと直しますと、みんな暇なものですからそれを眺めているだけです。これでは何もならないわけです。

それよりか、時間がかかっても草を抜いたり、道路に散乱した物を片付けたり、穴ぼこをモッコで運ぶ、近代的な機具はいりません。1台が働くと何十人かが失職しますからね。薄く浅く大勢の人が総出で砂を運び泥を運びローラーで押さえて、道を直していく。住んでる人の地域で毎日日雇いで進めると経済力がついていくわけです。そうすると戦争して怪我して、命を落としていくより楽しくて平和ですから、みんな鉄砲を捨てます。だんだんと経済力がつき技術力を同時につけてい

きます。最後はカンボジア人によるカンボジアの復興、アフガニスタン人によるアフガニスタンの復興というものをサポートする。そうでなくてすぐ物をあげたり、手を出すと、働かなくなる。ですからその土地の生きざまを支援していくということが“文化財の赤十字”だと思います。

昔、日本が戦争に負けたとき、私は15才でしたけれども広島で被爆いたしました。大勢の仲間が死に広島は大変な犠牲者が出ました。私も生き残りましたが、白血球が少なくなり大変苦労しました。まだ影響が残っている人もいます。そういう中で私は平和を祈るという絵を描きたいということで画家になり、それを続けているわけです。

また、日本文化の源流であるユーラシア大陸からシルクロードを何回も歩いています。自然崩壊或いは内戦、民族紛争、宗教紛争により、遺跡がどんどん壊れています。そういうところが一回壊れると二度と復興できません。世界史から消し去られます。

だんだんと日本の経済力がつくに従って、国際貢献として、文化の面でご恩返ししたらどうかということを思い立ちました。文化財保護をやらうと十数年前から、最初は敦煌で実施しましたが、当時体制が非常に違いますので大変苦労いたしました。体制が違って中国の大変な国宝であるとともに東アジアの世界の文化遺産な訳です。相手が困っているということでした。ご恩返しがしたいということで、昭和63年でしたか当時竹下総理をご案内して、敦煌の石窟保存協力の声明を発表し、ODAを文化の面で初めて発動しました。個人的にもおおいに応援いたしました。



今日では文化財保護でゼロだった敦煌が、世界で有数のユーラシア大陸の乾燥地帯の壁画の保護、塑像の保護の中心地になりました。国際学会が行われますし、それぞれの国々で同じようなものを所有している所の原理原則を敦煌で発見しているわけです。日本の文化財保護の研究所なども研究協力して大変な成果をあげております。

これは政治体制が違って文化に対する時空を越えた気持ちが導いた結果です。展示研究施設を造るときも地元で原材料を求め、地元の経済が繁栄するように、そして後のメンテナンスでも世話をするわけです。今日大変立派なものになっております。

只今、拉致事件等で心を痛め、日本中がどうかかならないものかと願っている北朝鮮に対して、高句麗古墳へ7回行きました、世界文化遺産にしようと協力いたしました。ご存じのように日朝関係は全く難しいときにあります。

こういうときに私は文化によるソフトランディングで、これをユネスコの親善大使として申し出ました。かつての同盟国のロシアも中国も昔ほどではありません。それぞれの立場がありますので、いろんな援助が薄くなると仲直りが大変です。南北統一もままなりません。そういう時に民族の誇りである高句麗古墳を世界文化遺産にするということはどれだけ誇りになるか、と説得しました。

歴史を簡単に紹介しますと、飛鳥地方に飛鳥寺という寺があり、住職（惠慈）は高句麗の方です。この寺を造った技術者もそうで、日本で一番古いお寺です。飛鳥大仏といわれる火災にあって修復された仏像がありますが、これを造ったときは、高句麗王から日本の推古天皇に金300両をお祝いに送ったそうです。当時は仏教は百済の国から来たわけですが、後に惠慈という人は推古天皇や聖徳太子の外交顧問の先生として、対隋政策などもやりました。こういった技術者の人は全部帰化し日本人になりました。そういう歴史が日本書紀に出ております。

今の日朝関係は、近代史だけ見るとお互いに救いがたいような感じですが、世界史のスパンで見ますと、いいときもあれば、お世話になっているときもある。日本人の血の中に高句麗の云々といわれてびっくりしておりました。

私は昨年「高句麗今昔を描く」ということで、

私が絵を描いて北朝鮮を日本で紹介するからということで、80点の素描を描きました。可能な限り北へ行ったり、西の海へ行ったりしてこちらの意図がだんだん解ってきまして先方は、何処を描いちゃいけないとか、何処へ行っちゃいけないとか言いませんでした。それで、日本全国20ヶ所ぐらいで展覧会をし、30数万の人に見ていただきました。その際、いろいろなアンケートを取りました。丁度小泉総理が訪朝し、帰って来られて8人がなくなったという大変な報道があったときに、神戸が会場で展覧会をやっておりました。

新聞記者たちもアンケートに大変興味を持ちました。「こういうときだからやってください」「拉致は拉致で、気の毒だけど日本政府に頑張ってもらおう」「やっぱり国交正常化については、おおいにやらなければいけない」入場した人で、誰ひとりとしてけしからんなどというアンケートはありませんでした。大変うれしく思いました。

特に朝鮮総連、韓国圏の民団の人たちのを読みますと「残念ながら分断されて悲劇にあります、先生何とかして下さい。1つになりたいんだ」という気持ちがあふれたような手紙が入っておりました。

私は国際的な外交というのはお互いに国益を代表してますから、譲れないところは一步も譲らないで堂々とやるべきであると思う一方、長い目で見て罪なき人々を困らせることをやってはだめだとそういう意味で私は動きました。政治と文化を分離し、政経も分離して、経済を先行させ、経済人が行って、中国の貧しいところをどんどん経済的に引っ張り上げて、その後田中首相が決断し、国交正常化が実現しました。今から30年前のことです。

私は朝鮮半島については文化で、政治と文化を分離して行い、理屈を言っていたら永久にうまく行かないと思います。東アジアの平和のために日本が朝鮮半島に対し、本当の気持ちで行かないと難しいなと思っております。

日本が、戦後あれだけ東アジアで迷惑をかけて今、平和文化国家を声明しているところで、平和への道を文化的な手段で、外国と仲良くしていくことが大切です。

私は北朝鮮へ初めて行く時、ワシントンで展覧会をやって講演いたしました。「日朝関係は厳し

いものがあります、日本はこれを打開するには私は文化で参ります。もし、私が拘束されたり、拉致されたら同盟国のアメリカに助けてくれ」と言いましたら笑っておりました。

文化の面でこれだけ日朝の古代史から関係があるのです。ご理解とご支援を願うといたら、日本人の発想でないといけないことだからやってくれと言われました。

アメリカとも大変仲良くしておりますし、いろいろな賞をもらって、フランスもドイツもイタリアも仲良くしております。それはみんなにご理解を請うと言うことで、日本はこういう手法でやりますのでよろしくということです。

各国も平和について表向きはいろいろ交渉していますが、最後には日本に助けを求め、日本は本当に文化国家でODAでいろんなことを言われるけれど純粋に経済協力をさせていただいている。しかも軍事・武器に関することを一切出してないというのは、先進国で日本だけですから信用できるんだということを言っております。

我々がつきあって肌身に感じますが日本はもっともってそういう面を自覚しながら異文化と共存できるようにおおいに仏教関係の方も出ていただきたいと思います。神道でも行っていただきたい。

ヨーロッパでもアメリカでも中東でも、向こうはイスラムもキリストも一神教で激突して、オールオアナッシングです。ところが日本は八百万やおよろずがありますので、仏教でもいろいろな形で神仏混淆になっておりますのでと、その話をするとう大変喜ばれます。あなたたちは不自由だと、日本は森羅万象いろんなものが神様であり、魂があるんだという話をしながら、とにかく考えが違っても共存できるんだからということをだんだんと伝えていきます。もっと日本は外へ出て精神的に文化の面で貢献すること、財力だけではだめだと思えます。経済と文化をあわせて行けばインパクトがあると思えます。

幸い文部科学省では今度教育基本法で伝統的な文化を入れるとか。私はその面で伝統文化活性化国民協会を文化庁でつくって理事長になっております。日本文化のアイデンティティをしっかり持って、そして異文化とつきあって行ってほしいと思えます。

日本の奈良の文化がなぜすばらしいかと言いますと、一番お手本になった唐文化が漢の文化を軸にインドの仏教文化やシルクロードの文化やペルシャの文化を入れた国際文化で世界性をもったものになっている。これを日本へ遣唐使節が大変な犠牲をはらいながらもって帰った。だから非常に国際的なんですね。それをだんだん日本化し、仏教も神仏混淆しております。

そういう価値観を持った日本が明治維新の時は和魂洋才と称して、和の心で欧米のハイテク技術を取り入れた。今はどうかというと、日本・アジアのアイデンティティが薄れた。教育問題でも躰の問題でも礼儀の問題も倫理の問題も、これをやれば、「やれ軍国主義だ」「やれ何主義だ」というものですから恐れてしまった。それと理念思想とは違うわけです。立派なことは受け継いでいかなければ日本は危ないというのが、昨今だと思えます。その遺産が、第2世代・第3世代とだんだん薄れてきた危機感が出ています。

私は明後日からウズベキスタンのタシケントへ参ります。寒いときですが私がタシケントに敦煌の第2の‘文化のキャラバンサライ’をつくりました。贈呈式を行い、展覧会をします。

私はウズベキスタン政府に1つだけ注文がありますと言いました。建設の途中から日本とウズベキスタンの両国旗を日の出とともに掲揚し、日の入りとともに降ろすこと。なぜか？日の丸の旗がきたら文化と平和がやってきたということです。シルクロードに、ローマに至るまでサライをつくりたいんだということを申しました。今度アフガニスタンにつくろうとしております。後はみんな協力してやってくださいということをお願いしております。

国内では皆様が、日本の宝である文化財を護っておられ又修復されております。これは立派なアイデンティティですから、若い人に見てもらって日本人の誇りとして大事にしながら、そしてまた新しいものを入れてそれを軸に世界に通用するような文化・技術を発信するという両面が必要だと思えます。

私は、皆様にその一歩を大変大事に護っていただいていることを感謝しながらまた、お願いしながら本日の記念講演を終わりといたします。